おくる日

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おくる日

【Ｎコード】
Ｎ３７１３Ｏ

【作者名】
ハル

【あらすじ】
満中陰のおはなしです。

四十九日。

近いうちにどうせ使うのだからといって、本葬から今日までクリーニングには出さず、吊るして、風の通してあった喪服を着た。

葬儀は関西特有のむっとした暑気の中で行われていたといっても半日程度のこと。洗わずにいたことを不快に感じるまでもなかった。けれど袖を通すとき、むかし、やはり頻繁に洗うことのできなかった夏の制服からしたような、懐かしい土埃と太陽の名残がわずかに喪服の襟から匂うようだった。

届かない背中に必死に手を回してファスナーを手繰り、雑多に小物を積んだサイドボードの上を見回す。探している数珠がない。女物の、水晶と瑪瑙の辛気臭いやつがない。

「なあ、おかあさぁーん。お数珠知らぁん？」

紹の喪服を着た母は階段から顔半分を覗かせて、ちらりと嫌な顔で私と自分の時計を交互に睨んだ。

顔も目も、そしてここからは見えないけれど体も、小さく丸い感じの母。彼女は丸い目をきゅっと三角に吊り上げ、「アンタに渡したまんま！　散らかしてるから分からんの。コウちゃんになんぼ怒られても片付けへんねんから」と一気に捲くし立て、階下に見えなくなった。先に支度を終えて私を待っていた母は、とっくに痺れを切らして機嫌が悪い。

「ユイちゃん散らかさんといてぇや！　ユイ、早ぉし！」

母は苛々とコータを口真似て私を急かした。同じ部屋を使っていた頃にコータがそう言って、しょっちゅう怒りながら私の月刊雑誌やランドセルを片付けていたからだ。

コータは私の弟。

口煩いくらいに面倒見がよくて、マメで、きちんとしていて優し

い、同い年の弟。元、従弟でもある。
元々ウチとコータの家は近所同士だった。
コータの両親が離婚したのは、私たちが小学校に入る少し前のことだ。両端を強固に握っていたはずの夫と妻が手を緩めた【家族】という網のほつれ目から零れ落ちるようにして、我家にコータだけが越してきたのだ。
父に手を引かれて。
以来、叔父や叔母と会う機会もなければ、あちらから、便りの一つもない。双子の姉弟みたいに仲が良かったのと、我家が手狭なせいで、正確には、私の部屋に越してきた大好きな弟。小中高と同じ学校に通った。
初潮を迎えて部屋を分けられると、さすがに遠慮が働いて直接手は出さなくなったけれど、それからも、二階の踊り場へ向いた部屋の襖を開け放しているとコータは相変わらず私を叱り、あれこれと世話を焼いてきたものだ。
なんとか喪服を着け終え、姿見に向かって顎を突き出す。
唇の輪郭をペンシルで整え、買ったばかりのグロスを塗る。さくらんぼみたいな色が結構いい感じ。こうやってお化粧すると、私もけっこう可愛い方だと思う。
喪装用のバッグにｉＰｏｄを入れようとして中からお数珠を発見。そこに化粧品とＤＳと、手帳とケータイを入れたあたりで蓋が閉まらなくなった。舌打ちしたい気分でＤＳを引き抜き、なんとか支度を終えて階段を駆け下りる。急ぎすぎて勢いがころせない。一段目に腰を下ろす母の背中を危うく蹴ってしまいそうになる。
「遅い、ユイ。はよ行くで」
「あと一分！　台所に忘れもんあんねん！」
ストッキングのせいでつるつる滑る廊下を走って台所の玉暖簾を潜り、私は水屋の抽斗に手を掛けた。　確か小学校のときに買った。アレは三番目に入ってたはず――。
「ないっ！　おかーさん抜き型どこやったんよ！」

「クッキーの？　一番下にあるやろ？　ああ、ユイちゃん。ついでにラップとタッパと割り箸持ってきて」
「そんなんいらんて。残ったら仕出屋さんが折り詰め作ってくれるやん」
教えられた抽斗を抜くと、中からステンレスの軽い音がする。アタリだ。
もみの木、星、花、猫。子供の好きそうな形ばかりの抜き型から一つを掴むとやっと、私は全ての支度を終え、玄関へと踵を返した。

ゴトゴトと垢抜けない音で路面を往く一両きりの電車に、母と二人揺られる。
もうすっかり高くなった九月の空は秋の色合いだというのに、今日はまだ、じわじわとした暑さが堪えた。母はそっと私の手元を見ている。ぱんぱんに膨らんだバッグ。法要の場にありえない、ちょっと非常識な品物も中に詰っている。中身の詳細は知らせていなくても、クッキーの抜き型が入っていることはバレているのに、母はあえて言及してこなかった。
その気遣いに胸が詰って息がうまく吸えない。重苦しいのは嫌いだ。でも、空元気につき合わせるのも嫌い。どうにもできない。
「お父さん、何時ごろ出たん？」
「二時間ぐらい前。ホームへお婆ちゃまを迎えに寄らなあかんから早よ出たんよ」
「ふうん」
ガラス越しに差し込む日光がうなじをチリチリと炙った。私は手を当ててそれを庇いながら車内を見回す。部活へ行くところだろうか。ちょうど自宅で思い出していた制服姿の生徒が三人、車輌の端で談笑をしている。時折声を潜め、上げ、笑い合う後輩達の姿が初々しい。自分もあんな風だったなんて思えない。思い出せない。
あの制服を脱いで、もう七年経つ。コータのお小言がなくなって

七年。時間の過ぎるのは嘘みたいに早かった。
そのうち半分以上は、時間が蒸発したみたいに私の中に残っていない。
「高等部やね。スカーフの色が紺やわ」
母もまばゆそうに目を細めた。
「アンタもちょっと前まであしてたのに。あれこれ言ってる間に、一人前みたいになって」
「はあ、お世話になりましたぁ」
白無垢のお嫁さんがするみたいに膝の上に三つ指をつくと、母は呆れ半分といった具合に笑う。
「しおらしい真似の似合わん娘ねえ」
「あんまし言わんといて。見かけによらず繊細やねんで」
「――ユイ」
「なに？」
「いつかちゃんと結婚、しなさいね」
「――そやね。いつかね」
私は取り繕うように喪服の裾を指で引いた。

あんな、すぐは無理やと思うけどな――。

黒い生地の張れた先を、コータの声が滑り落ちていく。数えきれないぐらいの喧嘩もしたはずが、思い出すのはいつも屈託のない、朗らかな声ばかりだ。日の照り返しがじわりと泣きそうな目元を拭って、足元へ逃げていった。

オレ、ユイをお嫁さんにしたいねん。

制服を最後に来た日の晩のこと。
卒業式の夜、祝いの席でコータは父母に言ったのだ。大好きの意味がいつの間にか変わっていたことは、その時まで、二人だけの秘

密だった。だからその夜、相談なくばらされた私は、嬉しいよりも、両親以上に面食らってしまったものだった。

坊さんにお経を上げてもらって、主のいない空っぽの骨壷で納骨を済ませた。たった四人きりの会食の席に、父が切った傘餅を取り出してくる。

この辺りの風習だ。

四十九日の法要後、大きく伸ばした丸い餅を長短に切り分け、積み木を並べるようにお遍路さんの人形を作る。

亡くなった人は四十九日間この世に居て、そのあと三途の川向こうへと旅立っていく。お遍路さんの形に置いた餅はその姿を表していて、この人形から自分の悪い部分をもらって食べると、亡くなった人がみんなの悪いところをあの世へ持って行ってくれるのだそうだ。

身代わり雛と似ているな。そう、私はぼんやりと不恰好に並んだ白い餅を眺めた。

まるで子供が、盆に盛った餅に悪戯をしたようだ。

父がお婆ちゃまの前に大きな餅の人形を押しやる。お婆ちゃまは膝が悪いから、足の部分を取られた。母は腰を。父は目を取った。

傘餅が私の前へ押されてくる。

あの日、コータはみんなのびっくりが収まる時間をくれるつもりだったのだろうと思う。豪華なちらし寿司を囲んで、口を鯉のようにぽかんと開けた親娘を置き、翌日、コータは友達と三日間の卒業旅行へ出かけて行った。

そのまま七年、とうとう今日まで帰らなかった。

失踪宣告の手続きが済んだ日は、コータが出かけて行った朝のような霧雨が、音もなく降っていた。

「なあ、コータみたいに生死が分からんままの人も、お葬式から四十九日の間、こっちにおるんやろか？」

父母の頬が強張る。失言。ここまで必死に装った平静さが台無しだ。お婆ちゃまだけは、意味が分からずにこにこと笑っていらっしゃる。

その笑顔に救われた思いがした。

バッグの中から抜き型を取り出し、私はお遍路さんの胸のところに押し当てた。正確に、抜きとるために持ってきた。これだけはふざけてバッグに入れたものじゃない。

「コータが間違って他のところを持って行かへんように」

心の形をした抜き型。

なんてバカっぽくて、なんて安易な思い付きだろう。でもきっと、一発で分かってもらえるはず。

餅を切る。弾力ある質感に、自分の身を切るような悲しさを覚えた。心が体から離れていくことを確かに感じながら、迷わず押し切る。

悪いところだけじゃなく、みんな、みーんな欠片も残さず持って行って。叱ってくれただらしのないところも、コータが好きになってくれたところも。

コータを好きになったこの気持ちも全部。

（後書き）

本文は別の投稿サイトでいただいた批評を元に修正を行い、
２０１０年１０月に開催されたそうさく系イベント「関西コミティア」にて
無料配布させていただきました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3713o/

おくる日

2010年10月18日00時55分発行